

## 誰もがふらっと参加できる居場所としての、教育・福祉農園型農業公園での取り組み —区立次大夫堀公園内里山農園を事例として—

一般財団法人世田谷トラストまちづくり トラストみどり課

菊地 直人、角屋 ゆず

(公園・緑地 居場所 農福連携)

### 1. はじめに

世田谷トラストまちづくりでは、区立次大夫堀公園内里山農園という約500㎡ほどの小さな畑の管理・運営を行っている。人にも生きものにも優しい農園をコンセプトに、地域の方々と月に一度、畑の耕作や堆肥づくりなどの活動プログラムを実施している。ここは区立農業公園であり、その中でも「教育・福祉農園」として位置づけられ、子どもの食育や環境教育、障がいのある方もそうでない方も、誰もが一緒に楽しみ活動できる農園を目指している。社会福祉協議会からは、ぷらっとホーム世田谷の利用者などに活動参加の周知をするなどの協力をいただいている。



「農福連携」では、担い手不足や高齢化が進む農業分野と就労の場を求める福祉分野が連携して問題を解決することが一般的だが、里山農園では居場所としての機能を重視した財団独自の「農福連携」を進めている。ふらっと参加してもそれぞれが思い思いに過ごせ、外出するきっかけづくりや何気ないコミュニケーションの機会の場となっている。本学会では、里山農園の取り組みをケースにした、農業公園がもたらす福祉的価値や方向性などについて取り上げる。

### 2. 実践内容

里山農園は、農業指導アドバイザーの協力のもと、農薬や化学肥料を使わないことや、入口フェンスの近くに花苗を植栽するなど、生物多様性豊かな環境を目指して管理している。定例活動は全員で農園を一周し観察することからはじまる。生きものたちとの出会いや植物の生育に目を向けている。農作業だけではなく、自然や生きものの存在をより身近に感じることができる。一回の活動に大体20名くらいが参加するが、その参加形態も多様で、小さいお子さんと散歩がてら様子だけ見に来る人、後半から参加し、少しだけ作業する人、定例活動以外に一人で来て雑草を抜くなど自主活動をする人など、それぞれが思い思いに過ごしている。



### 3. 考察と今後の課題

教育・福祉農園型農業公園での取り組みについて里山農園を事例として取り上げたが、その福祉的価値について以下の三つの視点から考察する。

- (1) 屋外型の居場所：新型コロナウイルスの影響で、屋内活動は人数制限や換気などの感染対策の徹底や室内ということで活動そのものが中止となることが多い中、屋外活動は屋内に比べて活動を行うことのハードルが低い。また、活動の様子を外から容易に窺えるため、屋内よりも比較的、輪の中への入りやすさを感じることができる。
- (2) 支援する側、される側で線引きされない関係性：どちらか一方が手助けされる側になるのではなく、フラットな関係性を築いている。活動時は細々とした様々な作業メニューがあり、参加者は好きなものを選んだり、もしくは気の合う仲間とお喋りして過ごすこともできるので、一人ひとり何らかの役割があるため、自分の居場所を構えることなく見つけることができる。
- (3) 園芸療法としての効果：大空のもと、深呼吸し、土に直接触れ、野菜を育てることはストレスが緩和され、免疫力が高まり、心身の健康状態が良くなると言われている。作業の中では仲間どうしの共通の話題があり、コミュニケーションを図りやすいので、社会的健康の回復も期待できる。

日々の暮らしの中の延長線上で、地域住民と関係性ができることにより、ちょっとした悩みや困り事を何気ない会話の中で相談できたり、解決につながったり、更に、有事の際には助け合うことができるかもしれない。

今後の課題としては、コロナの状況を見極めつつ、近くの高齢者施設、障害者施設、保育園などにも周知し、日常的にくり返し訪れてもらう人を増やし、農園を色々な方に活用していただきたい。

oo

<助言者コメント>

木本 義彦（世田谷区北沢総合支所長）

.....

かつて世田谷も農村地帯でしたが、都市化の進展により区内農地面積は、30年前（1990年）と令和2年（2020年）の推移を見ると、241.03haから81.34haと3分の1に、農家戸数も667戸から308戸と半減しました。そして今、農のある原風景を残して次代に伝える意義を持つ次太夫堀公園（民家園）内の野川沿いに、参加型の「里山農園」があります。入口脇にはちょっとした木立もあって、暑い盛りでの農作業の合間には木陰で一休みもできそうです。トラストまちづくりの取組みは、地方で注目されている「農福連携」をなぞるのではなく、都市における居場所機能を重視した独自のものとして、財団の強みを生かした事業であると発展性を感じました。

既に、車イスでも作業できる「上げ底式プランター」もあり、何より誰もが一緒に楽しみ活動できる農園を目指していることが、はやりの会員制貸農園とは異なります。農作業は、手をかけた作物の成長を実感できるし、その収穫は喜びとなり食べてもおいしいと、自分の取組みが評価されるようでもあり楽しい活動です。そうした楽しい場には、人が集まってくるものです。

福祉的な価値について考察されています。「支援する側、される側で線引きしない」とは、そうした固定的な役割分担を排除して、人と人、人と資源が世代や分野を超えて丸ごとつながる「地域共生社会」の実現にもつながるものです。ひきこもりがちで社会とのつながりが弱い方も、農園で人と一緒に作業することで、何気に話すきっかけにもなるようです。園芸療法として癒される効果も大きいでしょう。自然が相手ですから予期せぬこともあるでしょうが、里山農園の持つ可能性を広げ、多様な方々が安心して集えて交流できる居場所として、財団の更なる工夫と取組みを期待します。